

文化 第81卷 第1・2号 一春・夏一 別刷  
平成29年9月25日発行

## 不定詞節における動詞句省略\*

島 越 郎

## 不定詞節における動詞句省略\*

島 越 郎

### 1. はじめに

英語には、動詞句省略と呼ばれる次の省略文が存在する。

- (1) John loves Mary, and Tom does \_\_ too.

この文では、助動詞 does の後の下線部で動詞句 love Mary が省略されている。動詞句省略文は、主節のみでなく、従属節にも生起可能である。(2a) は副詞節内で、(2b) は目的語内で、(2c) は主語内で動詞句省略が適用されている。

- (2) a. John loves to cook, and he got some new pots so that he can \_\_ .  
 b. John wants to win, and Bill convinced him that he would \_\_ .  
 c. John doesn't want to leave, but that he should \_\_ is obvious.

(Zagona (1988:108))

これらの文は時制を持つ定形節 (finite clause) 内の動詞句省略の例であるが、不定詞 to を伴う非定形節 (infinitival clause) では動詞句省略の適用が制限される。

- (3) a. Bill wants to leave, but Mary doesn't want to \_\_ .  
 b. We should ask Mary to chair the meeting, since it's obvious that for Fred to \_\_ would be disastrous. (Zagona (1988:108))  
 c.\* John runs to stay fit, and Bill swims to \_\_ . (Zagona (1988:100))

文(3a)は不定詞節が主節動詞 want の目的語であり、動詞句省略の適用が許される。また、(3b)は不定詞節が would be disastrous の主語であり、この場合も動詞句省略の適用が許される。他方、(3c)は不定詞節が目的を表す副詞節であ

り、動詞句省略の適用が許されない。

本稿では、このような定形節と不定詞節に見られる動詞句省略の可否を説明しようとした先行分析を検証し、何れの先行分析にも問題があることを指摘する。その上で、動詞句省略文の派生には音韻部門における削除による派生と空の代用形 *pro* を含む派生の二つが存在すると提案することにより、不定詞節における動詞句省略の適用可能性に関する事実を説明する。

本稿の構成は次である。2節では、先行分析である Zagona (1988)、Lobeck (1995)、Johnson (2001) の3つの分析を概観し、それぞれの問題点を指摘する。3節では、代案として、PF 削除と空の代用形 *pro* により動詞句省略文を派生させる分析を提示する。4節はまとめとなる。

## 2. 先行分析の問題点

### 2.1. Zagona (1988) の ECP 分析

Zagona (1988) は、Chomsky (1986) で提案された障壁理論の枠組みにおいて、(2-3)に見られる動詞句省略を空範疇原理 (Empty Category Principle: ECP) により説明している。ECP は音形を持たない範疇に課せられる条件であり、主には移動の痕跡 (trace) の分布を規制する条件である。Zagona は音形を持たない動詞句省略も ECP に従うと仮定している。この仮定によると、痕跡と同様に、動詞句省略も適正に統率 (properly governed) されなければならない。動詞句省略の適正統率子 (proper governor) は、時制素性 [ $\pm$ PAST] を持つ屈折要素 (Inflection: INFL) である。(2) の定形節における動詞句省略は、時制素性を持ち、助動詞要素が生起する INFL により適正統率されることにより認可される。

他方、(3a,b) の不定詞節における不定詞 *to* が生起する INFL は、時制素性を持たないため、動詞句省略を適正統率できない。Zagona によると、不定詞節内の動詞句省略は、指示指標 (referential index) により認可される。具体的には、省略された動詞句が、それを支配する CP と同じ指標を持つことにより、動詞句省略が認可される。

- (4) a. Bill wants to leave, but Mary doesn't want [<sub>CP1</sub> [<sub>IP</sub> PRO to [<sub>VP1</sub> e]]]  
 b. We should ask Mary to chair the meeting, since it's obvious that [<sub>CP1</sub> for [<sub>IP</sub> Fred to [<sub>VP1</sub> e]]] would be disastrous

c.\* John runs to stay fit, and Bill swims [<sub>CP</sub> [<sub>IP</sub> PRO to [<sub>VP</sub> e]]]

(Zagona (1988:111))

構造 (4a) では、主節動詞 *want* が目的語である CP に指示指標を付与し、その指標が省略された動詞句に付与される。また、(4b) では、述語 *disastrous* が主語である CP に指示指標を付与し、その指標が省略された動詞句に付与される。一方、(4c) では、省略された動詞句を支配する CP は付加詞であり、指示指標が付与されない。その結果、CP より指示指標を受け取る (4a,b) の動詞句省略は許されるが、いかなる指示指標も付与されない (4c) の動詞句省略は許されない。

このように、Zagona は、ECP と指示指標の点から不定詞節内の動詞句省略の可否を説明している。しかし、この様な Zagona の分析には問題がある。

(5) a.\* Mag Wildwood came to read Fred's story, and I also came to \_\_ .

b.\* Lulamae Barnes recounted a story to remember because Holly had also recounted a story to \_\_ . (Johnson (2001:445))

(6) a. Mag Wildwood came to introduce the barkeep, but I came (precisely) not to \_\_ .

b. Lulamae recounted a story to remember because Holly had recounted a story not to \_\_ . (Johnson (2001:447))

文 (5a) では不定詞節が副詞節として、また、(5b) では名詞 *a story* を修飾する形容詞節として機能しているが、いずれの不定詞節においても動詞句省略は適用できない。他方、これらの不定詞節にそれぞれ否定語 *not* をつけ加えた (6a,b) の不定詞節では動詞句省略が許される。Zagona の分析によると、(5a,b) において省略された動詞句を支配する CP は付加詞であり、いかなる指示指標も持たない。そのため、省略された動詞句自体も指示指標を持たず、これらの動詞句省略は許されない。しかし、同様の分析が (6a,b) の動詞句省略にも当てはまり、(6a,b) を誤って排除してしまう。このように、Zagona の分析は、(5) と (6) の対比を説明できない。

## 2.2. Lobeck (1995) の一致分析

次に、不定詞節内の動詞句省略の分布に関する Lobeck (1995) の分析を検討してみよう。Zagona と同様に、Lobeck も ECP に基づく分析を提案している。但し、適正統率子に関する仮定が異なる。Lobeck は、時制要素を持つ INFL に加え、文否定要素も動詞句省略を適正統率できると仮定する。Lobeck によると、これら 2 つの要素は、強一致 (strong agreement) という概念に基づいて統一的に捉えられる。すなわち、時制素性を持つ INFL は TP 主要部に存在し、TP 指定部に生起する主語と一致の関係を持つことにより、強一致を持つ要素として指定される。また、文否定の not も NegP 主要部に存在し、NegP 指定部に生起する否定演算子と一致の関係を持つことにより、強一致の要素として指定される (Rizzi (1990))。その結果、動詞句省略は、時制素性を持つ TP 主要部、または、文否定要素の NegP 主要部により適正統率子される。

このような強一致に基づく適正束縛子の仮定の下、不定詞節における動詞句省略の適用可能性がどのように説明されるのかを見てみよう。不定詞節の to は時制素性を持たないため、to 自体が補部に生起する動詞句省略を適正統率できない。不定詞 to が動詞句省略を適正統率するためには、時制素性を持つ主節の動詞に LF で編入 (Incorporation) しなければならない。例えば、(7a) の動詞句省略文は (7b) の LF 構造を持つ。

- (7) a. Mag Wildwood wants to read Fread's story, and I also want to \_\_ .  
 b. ... and [<sub>TP</sub> I also INFL<+Tense> [<sub>VP</sub> [<sub>V</sub> want + to<sub>1</sub>] [<sub>CP</sub> [<sub>C</sub> C<sup>0</sup> + t'<sub>1</sub>] [<sub>TP</sub> PRO t<sub>1</sub> [<sub>VP</sub> e]]]]]

構造 (7b) では、不定詞 to が主節動詞 want に LF で編入し、更に、動詞 want と不定詞 to の複合体が主節の INFL に移動する。その結果、主節の INFL より to が時制素性を受け取り、to の痕跡 t<sub>1</sub> が動詞句省略を適正統率する。このように、時制素性を持たない不定詞 to 自体は動詞句省略を認可できないが、主節動詞に編入することにより動詞句省略を適正統率子する (Baker (1988))。

他方、(8a)=(5a) の動詞句省略文は (8b) の LF 構造を持つ。

- (8) a.\* Mag Wildwood came to read Fread's story, and I also came to \_\_ .  
 b. ... and [<sub>TP</sub> I also INFL<+Tense> [<sub>VP</sub> [<sub>V</sub> came + to<sub>1</sub>] [<sub>CP</sub> [<sub>C</sub> C<sup>0</sup> + t'<sub>1</sub>] ]

[<sub>TP</sub> PRO t<sub>1</sub> [<sub>VP</sub> e]]]]

構造 (8b) における不定詞 to は、副詞節内から外への移動を禁じる付加詞条件 (Adjunct Condition) のため、主節動詞に編入できない。その結果、(8b) における不定詞 to は時制素性を持たず、動詞句省略を適正統率できない。同様に、(3c) や (5b) における不定詞 to も時制素性を持つ INFL に LF で編入できない。従って、副詞節として機能している不定詞節内では動詞句省略の適用が許されない。

他方、目的節の不定詞節に否定語 not を含む (9a)=(6a)) は (9b) の構造を持つ。

- (9) a. Mag Wildwood came to introduce the barkeep, but I came (precisely) not to \_\_ .  
 b. … but [<sub>TP</sub> I came [<sub>CP</sub> C<sup>0</sup> [<sub>NegP</sub> OP [<sub>Neg'</sub> [not + to<sub>1</sub>] [<sub>TP</sub> PRO t<sub>1</sub> [<sub>VP</sub> e]]]]]]]]

構造 (9b) では、NegP 主要部に位置する文否定 not は、指定部の否定演算子 OP と強一致の関係にあり、動詞句省略の適正統率子として機能する。そのため、不定詞 to は NegP 主要部まで LF で編入することにより、主要部の not が動詞句省略を適正統率する。その結果、to は副詞節である CP の外へ移動する必要はない。(6b) においても、不定詞 to は不定詞節内の NegP 主要部に移動することにより、動詞句省略を認可する。

この様に、Lobeck は、強一致を引き起こす INFL と NegP 主要部が動詞句省略を適正統率すると仮定することにより、不定詞節内の動詞句省略の適用可能性を分析している。しかし、この様な Lobeck の分析は、(3b) や次の用例が示すように、主語である不定詞節内で動詞句省略が許される事実を説明できない。

- (10) For John to win the race was annoying.

? For Bill to \_\_ would have been much more exciting.

(Lobeck (1995:188, note 6))

- (11) For Mary to leave wouldn't bother me, but for Sally to \_\_ would.

(Johnson (2001:474, note 7))

これらの文における省略された動詞句は、不定詞 to に選択されている。

Lobeck の分析によると、to は時制素性を持たないため、動詞句省略を適正統率できない。また、不定詞節内には否定語 not が存在しないため、不定詞 to は主語内から外へ移動して、主節の時制素性を持つ INFL に LF で編入しなければいけない。しかし、この様な主要部移動は主語条件 (Subject Condition) に違反する。その結果、Lobeck の分析は、これらの不定詞節内の動詞句省略の適用を誤って排除してしまう。

### 2. 3. Johnson (2001) の話題化分析

最後に、Johnson (2001) の分析を検証しよう。Johnson も、移動操作に課せられる条件から、不定詞節における動詞句省略文の可否を説明している。しかし、Zagona や Lobeck の分析とは異なり、不定詞 to ではなく、省略される動詞句自体が移動すると仮定している。この仮定は、中国語における発音されない主語や目的語に関する Huang (1984) の分析に基づいている。Huang の分析によると、主語や目的語が話題化により文頭に移動し、移動先で省略されることにより、これらの要素が発音されない文が派生される。この分析を踏まえ、Johnson は、動詞句が話題化により文頭に移動し、移動先で省略されることにより動詞句省略文が派生するという分析を提案している。

よく知られているように、話題化は定形節内では適用できるが、非定形節内では適用できない。

(12) a. ? Lulamae decided that [eating rutabagas]<sub>1</sub>, she should be t<sub>1</sub>.

b. \* Lulamae decided [eating rutabagas]<sub>1</sub>, to be t<sub>1</sub>. (Johnson (2001:446))

この対比は、話題化を認可する統語的位置が定形節内には存在するが、非定形節内には存在しないことを示している。この話題化の特性を踏まえ、Johnson の分析は、(13a)=(3a) と (14a)=(3c) に対してそれぞれ (13b) と (14b) の構造を与える。(取消線の部分が省略箇所を表す。)

(13) a. Bill wants to leave, but Mary doesn't want to \_\_\_ .

b. … but [~~VP~~ leave]<sub>1</sub>, Mary doesn't want [to t<sub>1</sub>]

(14) a. \* John runs to stay fit, and Bill swims to \_\_\_ .

b. … and [~~VP~~ stay fit]<sub>1</sub>, Bill swims [to t<sub>1</sub>]

これらの構造では、動詞句が省略を受けるために不定詞節内から話題化を認可する定形節の左端に移動している。(13b)の不定詞節は動詞 want の補部であるため、動詞句の移動は許される。他方、(14b)の不定詞節は付加詞であり、不定詞節からの動詞句の抜き出しは付加詞条件に違反する。従って、(13a)の動詞句省略の適用は許されるが、(14a)の動詞句省略の適用は許されない。

このように、Johnson は、省略される動詞句は話題化を受けるという分析を提案している。しかし、この分析は、Johnson 自身が認めているように、(5)と(6)の対比を説明することができない。Johnson の分析によると、(6)は次の構造を持つ。

- (15) a. ... but [<sub>VP</sub>introduce the barkeep]<sub>1</sub>, I came (precisely) [not to t<sub>1</sub>]  
 b. ... because [<sub>VP</sub>remember]<sub>1</sub>, Holly had recounted a story [not to t<sub>1</sub>]

省略される動詞句が、(15a)では副詞節の不定詞節から、(15b)では関係詞節の不定詞節からそれぞれ移動している。これらの移動は許されないはずであり、Johnson の分析は文法的な文である(6)を誤って排除してしまう。

また、(10-11)の用例も話題化分析にとって問題となる。Johnson の分析の下では、これらの動詞句省略文は次の構造を持つ。

- (16) a. [<sub>VP</sub>win the race]<sub>1</sub>, [For Bill to t<sub>1</sub>] would have been much more exciting  
 b. ... but [<sub>VP</sub>bother me]<sub>2</sub> [<sub>VP</sub>leave]<sub>1</sub>, [for Sally to t<sub>1</sub>] would t<sub>2</sub>

これらの構造では、省略される動詞句が主語である不定詞節の中から移動している。しかし、このような移動は主語条件に違反する。従って、Johnson の話題化分析は、(10-11)の動詞句省略文も誤って排除してしまう。

### 3. 代案：PF 削除と空の代用形

前節では、不定詞節内の動詞句省略文の可否に関する Zagana (1988)、Lebock(1995)、Johnson (2001)の先行分析にはそれぞれ問題があることを指摘した。本節では、動詞句省略にはPFにおける削除操作と空の代用形 pro により派生する可能性があることを仮定し、不定詞節内の動詞句省略の適用可能性を説明する。



### 3.1 分析の枠組み

島 (2015) は、PF における削除操作と LF におけるコピー操作を引き起こす形式素性に関する仮定として、(17) を提案した。

- (17) a. Copy 素性 (C-F) を持つ主要部の補部と指定部には、空所と音形を持つ要素がそれぞれ選択され、LF で空所に先行詞がコピーされる。  
 b. Deletion 素性 (D-F) を持つ主要部の最大投射は PF で削除される。

仮定 (17a) の C-F を持つ語彙要素により選択された空所スロットには、完全解釈 (Full Interpretation) の要請により適切な構造が LF でコピーされる。一方、(17b) の D-F を持つ語彙要素 X は、D-F がその最大投射 XP まで浸透した結果、XP が PF で削除される。また、C-F と D-F が生起する位置に関する仮定として、(18) を提案した。

- (18) C-F と D-F は、フェーズである CP と vP の主要部に随意的に基底生成される。

以上の点を仮定すると、(1) の動詞句省略文は (19) の構造を持つ。

- (19) John loves Mary, and [<sub>TP</sub> Tom<sub>1</sub> does [<sub>vP</sub> t<sub>1</sub> v <D-F> [<sub>vP</sub> love Mary]]] too

この構造では、vP 主要部に D-F が基底生成されている。この場合、Tom が vP 指定部から TP 指定部に移動した後で音声化 (Spell-Out) が適用し、D-F を持つ v の最大投射 vP が PF で削除される。一方、v が C-F を持つ場合、(1) の構造は (20) となる。

- (20) John loves Mary, and [<sub>TP</sub> Tom<sub>1</sub> does [<sub>vP</sub> t<sub>1</sub> v <C-F> [e]]] too

この構造では、C-F を持つ v の指定部を音形を持たない Tom の痕跡が占める。その結果、(17a) の C-F の特性が満たされず、(20) は許されない。従って、動詞句省略は、vP 主要部の D-F が誘発する PF 削除操作により派生される。

また、空所スロットに適用される再分析として (21) を仮定する。

(21) 空所スロット [e] を導入する C-F の特性が満たされない場合、[e] は発音されない代用形 (pro-form) pro に随意的に再分析される。

発音されない代用形は空の要素ではなく、先行詞が代用形にコピーされることはない。この代用形は、代名詞と同様、先行詞の意味内容を直接指示するか、または、先行詞からの束縛により意味内容を受ける。

仮定 (21) によると、(1) の構造は (22) のように再分析される。

- (22) a. John loves Mary, and [<sub>TP</sub> Tom<sub>1</sub> does [<sub>vP</sub> t<sub>1</sub> v <C-F> [e]]] too  
 b. John loves Mary, and [<sub>TP</sub> Tom<sub>1</sub> does [<sub>vP</sub> t<sub>1</sub> v pro ]] too

再分析前の (22a) では、vP 指定部に生起する要素が音声情報を持たない痕跡であるため、(17a) に示す C-F の特性が満たされず、この構造は許されない。そのため、(22a) における空所スロット [e] が空の代用形 pro に再分析され、(22b) の構造が派生する。この場合、副詞 too の存在により、動詞句省略の残留要素である主語の Tom が焦点化され、先行詞文における主語の John と並立関係にある。その結果、代用形 pro は、等位接続詞 and の第一等位項内における動詞句の意味である  $\lambda x. [x \text{ loves Mary}]$  を直接指示し、(22b) の動詞句省略文が解釈される。このように、(21) の再分析によると、動詞句省略には (19) に示す PF 削除による派生と (22b) に示す代用形 pro による派生がある。

### 3.2. 先行分析の問題点の解決

以下では、動詞句省略文が PF 削除により派生する場合と代用形 pro により派生する場合があると仮定することにより、不定詞節内における動詞句省略の適用の可能性を説明する。まずは、動詞句省略文が PF 削除により派生する場合を考えてみよう。この場合、PF 削除の認可条件として次を仮定する。

(23) PF 削除を駆動する D-F は、時制素性を持つ TP と局所的関係になければならない。

この仮定によると、(24)=(19) において適用された削除操作は認可される。

(24) John loves Mary, and [<sub>TP</sub> Tom<sub>1</sub> does [<sub>vP</sub> t<sub>1</sub> v <D-F> [<sub>vP</sub> love Mary]]] too

この構造では、vP 主要部の D-F は最大投射 vP まで投射している。また、vP は時制素性を持つ TP 主要部の補部に位置する。その結果、D-F は時制素性を持つ TP と局所的関係にあり、(23) の認可条件は満たされる。

認可条件 (23) を踏まえて、不定詞節内で動詞句省略が適用されている (25) (= (3)) の用例を見てみよう。

- (25) a. Bill wants to leave, but Mary doesn't want to \_\_ .  
 b. We should ask Mary to chair the meeting, since it's obvious that for Fred to would be disastrous.  
 c.\* John runs to stay fit, and Bill swims to \_\_ .

(25a) の動詞句省略文を PF 削除により派生する場合、この文の構造は次である。

(26) … but [<sub>TP</sub> [<sub>vP</sub> v <D-F> [<sub>vP</sub> leave]]]<sub>1</sub> [<sub>TP</sub> Mary doesn't want [<sub>CP</sub> PRO to t<sub>1</sub>]]]

この構造では、D-F が投射された vP が時制素性を持たない TP 主要部の補部に基底生成されているが、この位置では (23) の条件を満たすことができない。そのため、D-F を持つ vP 全体が時制素性を持つ主節の TP に付加移動する。その結果、D-F が時制素性を持つ主節 TP と局所的関係に入ることができ、PF 削除は許される。

他方、(25b,c) の動詞句省略文は PF 削除により派生できない。本論の分析によると、これらの文はそれぞれ (27a,b) の構造を持つことができない。

- (27) a. … [<sub>TP</sub> [<sub>vP</sub> v <D-F> [<sub>vP</sub> play with rifles]]]<sub>1</sub> [<sub>TP</sub> [<sub>CP</sub> for Fred to t<sub>1</sub>] would [<sub>vP</sub> be [<sub>AP</sub> disastrous]]]]  
 b. … and [<sub>TP</sub> [<sub>vP</sub> v <D-F> [<sub>vP</sub> stay fit]]]<sub>1</sub> [<sub>TP</sub> Bill swims [<sub>CP</sub> PRO to t<sub>1</sub>]]]

構造 (27a) では、D-F を持つ vP が TP 指定部に位置する不定詞節の中から TP へ付加移動しているが、この様な移動は主語条件に違反する。同様に、(27b) では、D-F を持つ vP が副詞節である不定詞節内から主節の TP に付加移動し

ているが、このような移動は付加詞条件に違反する。従って、D-F を持つ vP は不定詞節内に留まることになり、D-F は時制素性を持つ主節 TP と局所的関係に入ることができない。その結果、PF 削除により (25b,c) を派生できない。

次に、動詞句省略文を空の代用形 pro により派生する場合を考えてみよう。この場合、(25a-c) はそれぞれ (28a-c) の構造を持つ。

- (28) a. Bill wants to leave, but [<sub>TP</sub> Mary doesn't want [<sub>CP</sub> PRO<sub>1</sub> to [<sub>VP</sub> t<sub>1</sub> v pro]]]
- b. We should ask Mary to chair the meeting, since it's obvious that [<sub>CP</sub> for Fred<sub>1</sub> to [<sub>VP</sub> t<sub>1</sub> v pro]] would be disastrous
- c. John runs to stay fit, and Bill swims [<sub>CP</sub> PRO<sub>1</sub> to [<sub>VP</sub> t<sub>1</sub> v pro]]

構造 (28a,c) では、不定詞節内の主語は音形を持たない PRO であり、焦点要素とはなり得ない。また、時制要素を持たない不定詞の to も焦点要素にはなり得ない。その結果、焦点要素を手掛かりに文脈から代用形 pro の先行詞を選び出すのが困難になり、(25a,c) の動詞句省略文を空の代用形 pro により派生できない。他方、(28b) では、不定詞節内の主語は音形を持つ Fred であり、Fred と Mary を対比させることにより chair the meeting を代用形 pro の先行詞として解釈することができる。その結果、(25b) の動詞句省略文を空の代用形により派生できる。このように、本論の分析によると、(25a) は PF 削除により、また、(25b) は空の代用形 pro によりそれぞれ派生するが、(25c) は何れの方法によっても派生できない。

本論の分析の下では、動詞句省略文を空の代用形 pro により派生させる場合、代用形の先行詞を選び出す手がかりとなる焦点要素が重要な役割を担う。(25b) では、不定詞節内の主語が音形要素を持つ Fred であることがこの動詞句省略文の容認可能性を高めている。実際、不定詞節内の主語が音形を持たない PRO である場合、主語である不定詞節内で動詞句省略を適用できない。

- (29) \*You shouldn't play with rifles, because to \_\_ is dangerous.

(Zwicky (1982: 7))

この文における不定詞節内の主語 PRO は焦点要素とはなり得ず、焦点要素を

手掛かりに文脈から代用形 *pro* の先行詞を選び出すことができない。また、(25b)と同様に、PF 削除により派生させることもできない。その結果、(29)の動詞句省略文は許されない。<sup>1</sup>

また、(25c)のような副詞節を形成する不定詞節においても、代用形 *pro* の先行詞を選び出す手がかりとなる要素が存在する場合、不定詞節内に動詞句省略を適用できる。(30)=(6)を見てみよう。

- (30) a. Mag Wildwood came to introduce the barkeep, but I came (precisely) not to \_\_ .  
 b. Lulamae recounted a story to remember because Holly had recounted a story not to \_\_ .

これらの文では、(25c)とは異なり、不定詞節に否定語 *not* が生起している。否定語 *not* が強勢を持つとすると、*A* が否定された *not A* は、*A* が表す意味の補集合 (complement) を含意する。すなわち、*not A* は否定されていない *A* の存在を想起させる。例えば、(30a)においては、省略文の不定詞節と先行詞文の不定詞節が否定語 *not* により直接関連づけられ、不定詞節内の代用形 *pro* が先行詞文内の動詞句 *introduce the barkeep* を先行詞に取ることができる。同様に、(30b)においても、不定詞節内の代用形 *pro* が先行詞文内の動詞句 *remember* を先行詞に取ることができる。同様な現象が、主語を成す不定詞節においても見られる。(29)の動詞句省略は許されないが、不定詞 *to* の前に否定語を置いた場合、容認可能性が高まる。

(31) You should unload rifles, because not to \_\_ is dangerous.

(Johnson (2001:447))

このように、本論の分析によると、主語や副詞節を成す不定詞節内の動詞句省略文は空の代用形 *pro* により派生し、代用形の先行詞を選び出す手がかりとなる要素の有無がそのような動詞句省略文の可否を決定する。

最後に、(29)と(31)の対比を次の条件から説明する Zwicky (1982) の分析の経験的妥当性について考えてみよう。

(32) 動詞句省略の残留要素である不定詞 *to* は、直前の音韻情報を持つ要素に主要部移動しなければならない。

この条件の背後にある考えは、音韻句 (phonological phrase) に関連する。不定詞節における *to* は直後の動詞要素と音韻句を形成するが、動詞句省略により動詞句要素が発音されない場合、直前の音韻要素に主要部移動することにより新たな音韻句を形成しなければならない。(32)によると、(29)と(31)の動詞句省略文は(33a,b)の構造をそれぞれ持つ。

(33) a.\* ...because  $t_{01}$  [<sub>CP</sub>  $t_1'$  [<sub>IP</sub> PRO  $t_1$  [e] ]]] is dangerous

b. ...because [<sub>CP</sub> [<sub>IP</sub> PRO not to [e] ]]] is dangerous

構造(33a)におけるCPは動詞に選択されていない主語であるため、不定詞 *to* がCP主要部から音韻情報を持つ *because* に主要部移動できない。他方、(33b)では、不定詞 *to* の前に音韻情報を持つ否定語 *not* が存在するため、移動する必要が無い。このように、(32)の条件の下でも、(29)と(31)の対比を捉えることができる。

しかし、(32)に基づく分析には問題がある。この分析によると、不定詞 *to* の直後に助動詞が動詞句省略の残留要素として残る場合、*to* は助動詞と音韻句を形成するため、先行する要素に移動する必要がない。この場合、不定詞 *to* は副詞節や主語節を形成する不定詞節内に留まるため、副詞節や主語節内での動詞句省略は許されると予測される。しかし、不定詞節においてこのような動詞句省略文は許されない。

(34) a.\* Mag Wildwood came to be introduced by the barkeep and I also came to be \_\_ .

b.\* You shouldn't have played with rifles because to have \_\_ is dangerous.

(Johnson (2001:446))

文(34a)では受け身形の助動詞 *be* が、また、(34b)では完了形の助動詞 *have* が不定詞 *to* の直後に動詞句省略の残留要素として生起している。不定詞 *to* はこれらの要素と音韻句を形成するため、直前の要素に主要部移動する必要は無

い。従って、(32)の条件に基づく分析は、(34)の動詞句省略が許されない事実を説明できない。

他方、本論の分析は、(34)を説明できる。先ず、(34)をPF削除により派生する場合、削除される動詞句を副詞節や主語節の中から外へ移動しなければいけないが、そのような移動は付加詞条件や主語条件に違反するため適用できない。また、(34)を空の代用形 *pro* により派生することもできない。この場合、動詞句省略により不定詞節内に残された助動詞要素は、先行文における要素と同じ要素であるため焦点要素とはなり得ない。その結果、これらの助動詞要素を手がかりに空の代用形 *pro* の先行詞を決めることは困難である。従って、(34)のような動詞句省略文はPF削除、空の代用形 *pro* 何れの方法によっても派生されない。このように、(34)を適確に排除できる点において、(32)に基づく音韻論的分析よりも、本論の分析の方が経験的に妥当である。

#### 4. まとめ

以上、本稿では、動詞句省略文がPF削除により派生する場合と空の代用形により派生する場合の二つの派生を仮定し、不定詞節内における動詞句省略文の可否を説明した。本論の分析によると、主節動詞の目的語に生起する不定詞節内の動詞句省略文はPF削除により派生できる。他方、主語や副詞節を成す不定詞節内の動詞句省略文はPF削除により派生できず、空の代用形 *pro* により派生される。この分析は、Zagona (1988)、Lobeck (1995)、Johnson (2001)等の先行分析にとって問題となる用例に対しても統一的説明を与えることができることを論じた。また、本論の分析は、音韻句に基づく Zwicky (1982)の分析よりも経験的に妥当であることも論じた。

#### 注

\* 本稿は、2011年5月の第83回日本英文学会のシンポジウム「機能範疇の統語特性と解釈特性を巡って」と2016年12月の東北大学大学院文学研究科英語学研究室講演会で発表した内容に改訂を加えたものである。その際に質問・コメントを頂いた多数の方々に感謝申し上げます。また、日本学術振興会科学研究費補助金（基礎研究（C）課題番号17K02803）の援助も受けている。

1. 非文(29)とは異なり、不定詞節を文末に外置した場合、動詞句省略の適用は許される。

(i) You shouldn't play with rifles, because it's dangerous to \_\_. (Zwicky (1982: 13))

本論の分析によると、次の構造が示すように、(i) は PF 削除により派生する。

(ii) You shouldn't play with rifles, because [<sub>TP</sub> [<sub>VP</sub> v<D-F>[<sub>VP</sub> play with rifles]]<sub>1</sub> [<sub>TP</sub> it's dangerous to t<sub>1</sub>]]

構造 (ii) では、削除される動詞句が外置化された不定詞節内から移動している。実際、この様な移動は許される。

(iii) How much wine is it possible/legal/fun/dangerous to drink \_\_ at a party?  
(Szabolcsi (2006: 509))

### 参考文献

- Baker, Mark (1988) *Incorporation: a Theory of Grammatical Function Changing*, University of Chicago Press, Chicago.
- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, MIT press, Cambridge, Mass.
- Johnson, Kyle (2001) "What VP Ellipsis Can Do, and What it Can't, but not Why," *The Handbook of Contemporary Syntactic Theory*, ed. by Baltin, Mark and Chris Collins, 439-479, Blackwell Publishers, Massachusetts and Oxford.
- Huang, C-T. James (1984) "On the Distribution and Reference of Empty Pronouns," *Linguistic Inquiry* 15, 531-574.
- Lobeck, Anne (1995) *Ellipsis: Functional Heads, Licensing, and Identification*, Oxford University Press, New York and Oxford.
- Rizzi, Luigi (1990) *Relativized Minimality*, MIT Press, Cambridge, MA.
- 島 越郎 (2015) 『省略現象と文法理論』 開拓社, 東京.
- Szabolcsi, Anna (2006) "Strong vs. Weak Islands," *The Blackwell Companion to Syntax vol. IV*, ed. by Martin Everaert and Henk van Riemsdijk, 479-531, Blackwell Publishing, Massachusetts and Oxford.
- Zagona, Karen (1988) "Proper Government of Antecedentless VP," *Natural Language & Linguistic Theory* 6, 95-128.
- Zwicky, Arnold M. (1982) "Stranded *to* and Phonological Phrasing in English," *Linguistics* 20, 3-57.



## VP-Ellipsis in Infinitives

**Etsuro SHIMA**

In this paper, I will try to explain a wide set of contrasts involving the so-called VP-ellipsis in infinitives by assuming two types of approach to generate appropriate meanings for VP-ellipsis. One is to derive a surface structure by deleting constituents under identity with other linguistic material. Another is to assume that an elided site involves a null proform which is assigned an interpretation through the anaphoric relation it bears to some other semantic object in the discourse representation, as are other pronouns. Given this assumption, I will propose that the first type of VP-ellipsis appears in infinitival complements, whereas the second one occurs in infinitival subjects or adjuncts.